

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370168

研究課題名(和文)映画フィルム文化の歴史的・技術史的な基盤研究

研究課題名(英文)Historical and technological study of film culture

研究代表者

板倉 史明 (ITAKURA, Fumiaki)

神戸大学・その他の研究科・准教授

研究者番号：20415623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：映画製作から上映まであらゆる側面においてデジタル化が進行する現在の状況下において、映画フィルムや資料の発掘・調査・分析を通じて、失われつつある映画フィルム文化の批判的再検討と再評価をさまざまなレベルで実施することができた。特に神戸映画資料館とIMAGICAの協力を得て、多くの成果をあげることができた。

研究成果の概要(英文)：This project has been well executed with my activities of film discovery, research and investigation. And I was able to reexamine and reevaluate the culture of films in the middle of this recent digital age.

研究分野：映画学

キーワード：映画 フィルム メディア 現像

## 1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、日本の大学において映画学研究が活発化し、理論研究や歴史研究の蓄積が充実してきた。しかし従来の映画研究のなかで主な分析対象になってきたのは、公開された映画作品であり、または出版された映画雑誌や新聞といった言説である。それらの研究に欠落していた要素とは、モノとしての映画フィルムの歴史的かつ技術的な視点であり、同時に、映画フィルムを焼付・現像する現像所(ラボ)や映画機材に対する歴史的かつ技術的な視点である。

確かに映画作品を研究するにあたっては、映画館で映画を見たり、DVDやインターネットで映画を視聴すれば十分かもしれない、多くの映画研究者が物質としての映画フィルムの知識はほとんど必要ないと考えている。しかし、映画作品の映像と音声、映画フィルムという物質的なメディアにいかにか記録されているのか、あるいはその映画フィルムがいかにか現像所において複製されたのかといった製造プロセスの歴史的かつ技術的な知識は、映画学という学問領域のまさに基盤となるべき研究領域であり、これらの専門的知識があれば、各時代の映画作品で使用された演出や映像手法の技術的な特性や限界を含めて、従来の映画研究よりも深い解釈と理解が生まれることは間違いない。このことは、たとえば美術史研究において絵画作品のテーマや手法を分析する際に、その作品が生み出された時代の絵具や顔料の特性、そして筆やキャンバスの素材や製造工程などといった物質的な側面の知識を付加することで、分析の説得力が増し、研究に厚みが加わってくることと同様である。

もちろん映画フィルムに関する歴史的・技術的研究が日本でこれまでまったく存在しなかったわけではない。東京国立近代美術館フィルムセンター(以下、フィルムセンター)をはじめとする日本のフィルム・アーカイブにおいて、映画フィルムについての専門的研究は進められてきた(申請者もそこに7年半研究者として属してきた)。ただし残念ながら、大学における映画学とフィルム・アーカイブにおける専門知は、これまで互いの研究成果の交流を積極的に進めてこなかった歴史がある。

## 2. 研究の目的

本研究を立案したより大きな背景として、20世紀の映画文化を支えてきた映画フィルムの歴史と文化を、後世のアカデミック・コミュニティに対して正しく継承しなければならないという危機感がある。2012年の現在、世界中の映画産業において、映画フィルムというアナログメディアから、デジタルメディアへの構造転換が起こっている。いまや映画の撮影から編集、そして映画館における上映まで、すべてのプロセスにおいてアナロ

グからデジタルへの転換が急速に進んでおり、日本の大手映画館チェーンは、あと1-2年のうちに、ほぼすべての映写設備を従来のアナログ的なフィルム映写機から、デジタルデータを投影するデジタルシネマへの設備転換を完了させる。このような変化は、生フィルムメーカーの衰退、フィルムの焼付けや現像を行う現像所の規模縮小や大量のリストラ、そして映写機メーカーの倒産とメンテナンスの終了など、映画産業全体の急速な再編につながっている。

近い将来、映画フィルムにまつわる撮影・複製・上映の技術や文化が、20世紀を席卷した映像文化のひとつとして、歴史的な対象物になることを意味している。そうであれば、日本の映画学者たちは、早急に映画フィルムにまつわる資料を収集して安全に保存したうえで、映画フィルムに対する歴史学的・考古学的・文化財科学的な観点からの研究・調査を進めてゆくことが求められている。そしてそのようなフィルムに関する基礎的な調査・研究を、従来の映画研究の手法に接続することによって、20世紀の映画文化をより正確にとらえることのできる高次の映画研究のスタイルを生み出してゆかなければならない。

## 3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために行うのは、以下の4つのプロジェクトである。

1) 映画フィルムのフォーマット、画面比率、色彩技術(彩色・染色。調色等)の歴史の解明

文献調査のみならず、富士フィルムやコダックの生フィルムメーカー関係者へ聞き取り調査を実施。

2) 現像所に関する歴史研究

従来の映画研究では、フィルムを焼付・現像する現像所の役割が等閑視されてきた。このままの状態が続けば、フィルム文化を語るうえで欠かすことのできない現像所の歴史が空洞化してしまう。本研究では現像所の協力を得て、技術資料や機材の調査を実施するとともに、ベテラン技術職員への聞き取り調査も行う。

3) 劣化フィルムの復元

上記の映画フィルムと現像所に関する新たな知見に基づき、劣化して早急に複製が必要とされるフィルムに対して、復元プロジェクトを実施する。劣化フィルムは、民間のフィルム・アーカイブである神戸映画資料館の協力を得て提供してもらう。

## 4. 研究成果

1年目は、現像所の歴史を探るべく、大阪の現像所であるIMAGICA ウェストにおいて、関連資料を閲覧したほか、IMAGICA ウェスト

の現役スタッフおよび OB の方々への聞き取り調査を、同社松尾好洋氏と共に実施し、過去の現像所内における仕事内容等を記録した。さらにこれまで発行された映画書籍や雑誌のなかの現像書関連の記事を収集した。特に、1930年代の映画撮影所である新興キネマの現像課スタッフが残した一次資料を入手し、翌年度の日本映像学会全国大会において口頭発表した。

2年目は、2014年6月8日、日本映像学会第40回大会（於：沖縄県立芸術大学）において、「日本の撮影所における現像部の役割と現像プロセスの検証 新興キネマ現像部資料を読み解く」と題する口頭発表を、松尾好洋（株式会社IMAGICA ウェスト）氏と共同で行った。また株式会社IMAGICAの協力を得て、同社の戦前資料の閲覧とデジタル化を実施することができた。また1930年代に日本に輸入されたアマチュア映画作家たちに活用されたコダカラーというフィルムについての調査とデジタル化に関する調査・研究を実施し、翌年度の日本映像学会で研究発表した。

3年目の最終年度は、これまで蓄積した調査・分析を複数の成果としてまとめ、発表した。まず第41回日本映像学会全国大会（2015年5月30日、京都造形芸術大学）では、「1930年代におけるアマチュア映画文化と色彩 コダカラーの研究活用とアーカイピング」と題して、松尾好洋氏と共同発表を行った（その成果は単著『映画と移民』新曜社、2016年3月）にも反映された。また、東京国立近代美術館フィルムセンターが所蔵する小宮コレクションについて、京都国立近代美術館の映画上映イベント「MOMAK FILM」のリーフレットにおいて「映画コレクションから見えるフィルムの循環と異文化受容（MoMAK F Column 006）」と題するエッセイを執筆した（2015年4月）。さらに、映画フィルムの復元の倫理に関する論考である「映画復元の倫理とテクノロジー 四つの価値の百分率」を、塚田幸光編『映画とテクノロジー（映画学叢書）』（ミネルヴァ書房、2015年4月発行、269-290）において執筆した。

また、大阪箕面市で戦後に活躍したアマチュア映像作家沖中陽明のフィルム調査を実施し、その成果は2回の講演としてまとめられた。

以上のように、映画製作から上映まであらゆる側面においてデジタル化が進行するなかで、映画フィルムの発掘・調査・分析を通じて、映画フィルム文化の批判的再検討と再評価をさまざまなレベルで実施することができた。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

## 〔雑誌論文〕（計 3 件）

板倉 史明、映画コレクションから見えるフィルムの循環と異文化受容（MoMAK Column 006）、京都国立近代美術館 MOMAK FILMS リーフレット、査読なし、6、2015、ページ番号なし

板倉 史明、「旧劇」映画における物語叙述のスタイル再考 『雷門大火 血染の纏』（1916）を分析する、『早稲田大学演劇映像学連携研究拠点テーマ研究「演劇博物館所蔵映画フィルムの調査、目録整備と保存活用」』（平成21年度～25年度）』成果報告』、査読なし、2014、12-17

板倉 史明、『くもとちゅうりっぷ』のデジタル復元、『NFC ニューズレター』、東京国立近代美術館、112、2013、14-15

## 〔学会発表〕（計 7 件）

板倉 史明、1930年代におけるアマチュア映画文化と色彩 コダカラーの研究活用とアーカイピング、第41回日本映像学会全国大会、2015年5月30日、京都造形芸術大学（京都府）

板倉 史明、わたしにも遺せます ホームムービーを、我が家の記録にアーカイブ、講座「知るみのお・伝えるみのお：知っていますか？沖中陽明さん 箕面で暮らした8ミリ映画作家」、2015年6月28日、箕面市中央図書館（大阪府）

板倉 史明、沖中陽明を知る、講座「知るみのお・伝えるみのお：知っていますか？沖中陽明さん 箕面で暮らした8ミリ映画作家」、2015年6月14日、箕面市中央図書館（大阪府）

板倉 史明、The Japanese Imagination of Space and Audio-Visual Media、30th ISTS(International Symposium on Space Technology and science、2015年7月9日 神戸コンベンションセンター（兵庫県）

板倉 史明、戦前のアマチュア影絵アニメーション、公開研究会「イメージのサーキュレーションとアーカイブ」、2015年3月21日、神戸映画資料館（兵庫県）

板倉 史明、戦前のコダカラーフィルム、成果発表会「神戸と映画 第5回 見出されたもの」、2015年3月1日、神戸映画資料館（兵庫県）

板倉 史明、松尾好洋、日本の撮影所における現像部の役割と現像プロセスの検証 新興キネマ現像部資料を読み解く、

日本映像学会第40回全国大会、2014年6月30日、沖縄県立芸術大学（沖縄県）

〔図書〕（計 2 件）

板倉 史明、新曜社、『映画と移民』、2016年、274

板倉 史明、ミネルヴァ書房、『映画とテクノロジー（映画学叢書）』、2015年、269-290

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

板倉 史明（ITAKURA Fumiaki）

神戸大学・大学院国際文化学研究科・准教授

研究者番号：20415623